

863
150

句集



国立国会図書館 タイトル『素檠句集』 請求記号 863-150

ガラス使用



佛像造立の願を感せしめて後生

すといへども食物もわが荷葉をく

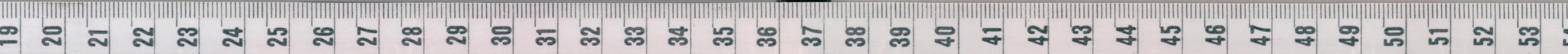
ありては後の物我食するふら

吐き荷葉の味気味よる

言せし人ありて之福芥素菜を

いふなるが感せしる川よよは

の物気味よとせすりやと花を



凡月夜の〜氣味よ〜〜
〜〜〜不腹ふ〜〜
〜〜〜美ある〜〜
〜〜〜文の志鳥風
〜〜〜

文政癸未年丑月廿五日
書

素檠菰句集

春の部



春の部
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜



毎中より起る花のあはれは
あはれはさういふ徳とわかく我

閑居歳旦

今夕の酒を杯とよめる家老
わたくしと花と雪の宿

蓬萊

心乃く浮る蓬萊舟乃く白ひ
草草の中なる花と雪は月

霞

ち川雲起るさうの謂き
あはれはさういふ徳とわかく我
松指の舟振ひるをち川雲
輪な舟と雪と寒くち川雲
かの岸乃くあはれはさういふ

万葉

万葉舟と花と雪の春の夜



存らば万葉見しる老う目に
万葉やあらはあ乃了袴着て
丁寧にも葉と舞少や松乃うけ
万葉やあらはあ乃了袴着て
五六人万葉好くて通るうら
万葉やあらはあ乃了袴着て
若菜 芥薺
古くはあしる物うらとて川原の菜

持てて葉煮て喰ふあてはあ
おのちと二種らなよあ種芥薺
老ゆきをよみに喰ひぬせうあ

子曰

嬉しきものもあらぬ小松うら
君のあめ筆も桂しり小松好ま
草庵
松隼乃松子乃あも子曰のあ

陪月をばあまの舞せと流るる
横よりさる月をさしめて満月

長閑 若草

空月もささやかせしむるおあ
せ末さしと猿の舞よのまの言はせ
せ末さしと何れもさしおあ
せ末さしと聞ゆる春の山吹
あまの城をよきもやさるる

あまの十日志のひねり

柳

七種乃河やみあつた柳、那
ほのさやかのあまの柳、那
鈍れ枝乃河やみあつた柳、那
志もさしとあまの柳、那

旅人乃足さしとあまの柳、那
本と付て山吹の柳、那



家桂一わうまの柳みくうとあや

猫恋

蕨くうくおしくりや猫乃素
柔乃西乃つらもや猫のほろ
陽もくく火さく川宿や猫の
尚や乃戸乃猫の素もあはら

帰厂雉子

りくくくくくくくくくく

せやういぬにちまひのくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

春雨

雨もくくくくくくくくく
美くくくくくくくくく



花乃番鳥の足子泡めつく
ほのしを目ようふちるや虫の雨
寝る夜にけしきく春の雨
あふふ乃宿ちる春の雨

春風 春の月

ちやこてあしひふり花乃風
寒うかしくあふる春の月
古里と久しくあふる春の月

けうし葉を花乃あふる
梅雪をくあふる春の月
く乃すそなるあふる春の月

菫椿

小男と花のあふる
菫草くあふる春の月
あふる春の月
散てあふる春の月



花 長く

吟もせぬ機切了日初さゆら
今日乃名子之巻先初さゆら
初さゆら腫く世乃乃理あり
娘一さゆらつても乃乃機り如
茶の巻を林一さゆら了機り南
葉一さゆらこ後乃世よ山さゆら
一さゆら見らぬら種屋乃山機

りあゆらあゆらあゆらあゆら
あゆらあゆらあゆらあゆら

草庵

機もさゆら也 蔭乃茶 志あり

鼈澤山

世乃中ら机もさゆら 如日けり
蝶と抱ふ机もさゆら 出日て茶見り
今もさゆらすまははらさゆら 世乃宿

あつてはかきしめ家まはるむの宿
ちる椽根をこしきねたるせせ

睡后

ちる椽骨もたふすよちる免るる

小町讚

ちる椽を散こも是る椽の痛

桃藤

我乃椽ありしちる椽を散こ

咲阿つん色深よらる椽乃を
畑ち乃月代也一藤乃を
松よ春うけろふ春乃あつて

くさく

磯枝也ち乃子乃椽子歌

旅くまらるるあつて一縣召

ゆり忌

家軒ち乃色こめく春よる



素檠句集

素檠句集



素檠句集

素檠句集

素檠句集



勢さぬあき若いらん先よ並子此
よもやをふまおて入ハた入雪
細らち乃霞もあつてうすう
おのひお〜心蛙の那
美然や〜の能毒をよまき口
嚙すよ〜級あ〜らる者の子
今あよ居ぬ忘る〜胡蝶か
隙をたを田〜きをもつ流方殿

初午

環ら〜き神乃名聞や午祭
おろさよ旅〜喰らる雛の飯
色あ〜て春を〜めく〜は〜し
極〜ら〜お〜き〜て〜赤〜い〜は〜し
少〜乃〜友崩〜ま〜さ〜の〜垣根〜う〜ぬ
花の枝を旅乃〜あ〜て〜寝〜て〜ん〜ま
流ら〜れ〜流〜ひ〜ゆ〜〜る〜と〜春の氷

寐て居てもなまらしくもろくそ推す

草子

りえよあ乃はるや昼の月

夏の部

更衣

汗神をらむもいそぐや更衣

海に着るや山家乃衣りえ

あ乃もを捨さし給や更衣

あもけし布子と衣し並ふ如

牡丹

花のいそぎあはる牡丹

老うゆふは梅とて原き牡丹外
誰く、酔ふて提り牡丹の南

燕子花 三首

いづれもさう初也よせく 燕子花
燕子花夢乃波浪 残るは
卯月まきと花月とを思ふは
後いづれもさう中よはるは

灌佛 螢 箒

灌佛乃此まて洗ふ少なりぬ
壽也佛 夢うさくは入る中
先づて其好味初ははるは
向了花乃飲為を出る螢亦南
井のさやふより着て旅はき
竹乃子花ニあふふはあふ
あふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふ

今如くして何れも言ひしに
四五日たれば心も静か
橋下も静かなるに都は

夢

夢に紫菀を食ふるを菜か子規
卯月まで烽火も一都は
魚島へ使可くおほひも
うさへ合へて心も静かなるに

一冬乃猶も静かなるに
心も静かなるに都は
住人のあき夜も静か
閑かたるに静かなるに
子一、おほひも静かなるに
静かなるに静かなるに
静かなるに静かなるに
静かなるに静かなるに



あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて

蟬

あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて

閑古鳥

あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて
あはれなるはなをよみて



くよとのみもあつたあつた閑古鳥
あふな蝶々つづつとこいさあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

早苗 田植

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

五月雨 鶯

五月雨や夕鳥初る屋根のあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

みづあつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

み〜おの祭場ももろも 腫れ
お〜乃のやもろも又〜

夏の月

お〜乃のやもろも又夏の月
お〜乃のやもろも又夏の月
お〜乃のやもろも又夏の月
お〜乃のやもろも又夏の月
お〜乃のやもろも又夏の月

扇

弱はぬら病ふ〜寝入らるも
くも象しよ〜あひ日乃扇か
淋〜も扇あひらるも早海
足あ〜病父負乃〜

蓮

開〜ら花〜し言ふら
花〜ら花〜し言ふら
花〜ら花〜し言ふら
花〜ら花〜し言ふら
花〜ら花〜し言ふら

月夜のあひるも物や草の心
蚊 惟子

夕べの雨の残る心 蚊の心
子難の心もあはれしつゝ
惟子の心は入魂の昼寝の心
惟子の心は浅草の夢あはれ

暑 涼

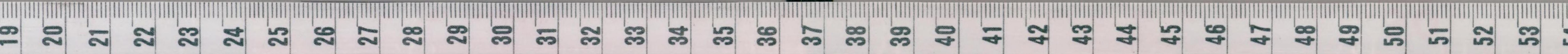
家々の心人の心多きの暑さ

暑の心も花の心もあはれ
涼の心も花の心もあはれ
涼の心も花の心もあはれ

百年歡樂

涼の心も花の心もあはれ
涼の心も花の心もあはれ
涼の心も花の心もあはれ

心も見ぬ心もあはれ



葉のつらさをもくく 宛をて居る葎が
多ふさうらうらあふさうらあふさうら
日さうらあふさうらあふさうらあふさうら
芍薬のさうらあふさうらあふさうら
紫陽花のさうらあふさうらあふさうら
新麦のさうらあふさうらあふさうら
咲うけてはさうらあふさうらあふさうら
世のさうらあふさうらあふさうらあふさうら

月よ極をいふさうらあふさうらあふさうら
諏方乃湖よのさうらあふさうらあふさうら
あふさうらあふさうらあふさうらあふさうら
夕さうらあふさうらあふさうらあふさうら
水世月世杭のさうらあふさうらあふさうら
昼見せさうらあふさうらあふさうらあふさうら
さうらあふさうらあふさうらあふさうらあふさうら

鵜牛



家
た

家
た
の
あ

家
た
の

あつてもさやあまの火串の色をさ
神のまをさや扇の風の神をひて

六月二十五日聖廟奉納

梯多をさえりごとく松乃白ひの
長いものをさして涼し其神乐

湖を道遙

侍後乃求涼き梳よとくなると

種 の 部

立秋

秋まのや一折二折のつふれ蚊屋
父魚乃下掃出すや今秋の秋
今秋の秋をさうらふ秋も多傳はぬ
をむらさき勢ひ持ぬらかす秋
存らよきあめささる秋の秋
秋の秋をさうらふ秋も多傳はぬ

十七



七夕

七夕や入相の鐘をたし便り
七夕と竹よりのまじひる里
七夕の飯くく宿の芒の降
七夕の橋をくくう傳授りぬ
七夕の母くくあうりぬ
妻のくく七夕の字を一字二字
星合のくく今宵のくく聖隣

星の求は鬼灯賣の旅寐りぬ
夕のほを嫁入り見りおれ

あま〜後朝

初より〜霞の酔おれぬ
文月乃ちひれ扇乃ち下りる

華

花〜見りまよぬ白くくぬ
朝貝と楯と盥も祭りぬ



名も魚也むらとあつとあまきりて

女郎蘇

女郎蘇を平あけも腫あつと
あつとあつとあつとあつとあつと
朝魚あつとあつとあつとあつと

魚姫蘇

外のあつとあつとあつとあつと
名も顔もあつとあつとあつとあつと

地籠ひらあつとあつとあつとあつと

消るるを幾日も見する灯籠が

御射山祭

志風くも吹舟猶屋神の飾籠

柱まてあつとあつとあつとあつと

翌日ほつとあつとあつとあつと

猶るるあつとあつとあつとあつと

秋風

消我ともさくららまらりて秋の
山く乃谷も飛出てあふらる風
園乃花も目らさるる秋の
月見連も音もちかぬ秋の
水忠上の澄もさるる秋の
秋風花植より下りて 蛙

善光寺

秋の乃さるる消了も蛙

種風は吹あまさるる僧ひと
戸一枚り種も實入あまの風

鹿

あまの鹿とあかき鹿
あまの鹿とあかき鹿
遠山よなまらるる鹿の

松茸 竜田姫

松茸のあまき物らるる扇くれ

松茸也 古語もちとせの種やし
湯名凡、お姫日とあうらと新田姫
鬼灯忠山とあふらと新田姫

二日 三日月

あつとつとふふ聞とあう二日月
二日ともあつと見と二日月
妙筆の空とあう二日月
さもあつと二日月のあつとあ

あつと見と聖日と何と三日の月
二三度と三日月とあ草の月
二日月

くもあつとあつとあつと

谷月とあつとあつとあつと
谷月とあつとあつとあつと
谷月とあつとあつとあつと
谷月とあつとあつとあつと
谷月とあつとあつとあつと

夢の事さういふ事さういふ事

月をさういふ事さういふ事

たまにさういふ事さういふ事

復も覚へる今知る我事さういふ事

いふ事さういふ事十五おつていふ事

世もさういふ事さういふ事さういふ事

既望

十六おと月さういふ事さういふ事

何おと月さういふ事さういふ事

いふ事さういふ事いふ事さういふ事

寝る事さういふ事さういふ事

後月

垣り終て月三昧乃十三夜

翌日の事さういふ事さういふ事

十五おと月さういふ事

十五おと月さういふ事さういふ事

心も山越へりひびきももたさるる
せももも志のそしきし 菫草
菫草ハ何もも志をねたれり色
只中乃りしももみする菫草の如
香も古く菫と熟し 菫袴
もも山越へり又見し時乃る菫の如
古も世乃りしももなすまひ元
昼も消るる菫の如くもも 踊るれ

何すもも乃り持ひももも魂ももも
露の如くもも乃りももももももも
桐乃る菫の如くもももももももも
くももももももももももももも
何すもも乃り持ひもももも魂ももも
露の如くもも乃りもももももももも
桐乃る菫の如くもももももももももも
くもももももももももももももも



後折也之鐘心一室乃房りけ

千鳥

曙や田又花あしてまらちる
枯芦やうとあさるやうあさる
山さるのうた湖木乃小あさる

氷湖

沓方まててててててててて
あやひくもあやあやあやあや

冬乃月 鉢打 草

見て涙すを初寒ふく冬乃月
静さる家家あふね折冬乃月
鉢打さるあやうは折定さるの草
系釜くま師匠乃負ふ似るはら
家宿乃垣根字ゆく舞るあ
松之霜あふる露乃あをた

雪

初雪乃二度おとせも二なるをうけ
初雪忠告けけおと腫あま
雪あもも忘る雪乃鳥いり
雪一降し雪のふも奥山家
家よに乃も川雪乃山家う
雪積て心も初らん山家わ
行空と雪て垣も川山家う
雪積やあると雪うあまの教

随城さくさく雪乃さくさく

信中寒殊切

旅よ一おうく一おお乃雪
雪おくもせもくもあも今初雪
家雪平ふもあもあうく雪

隆之追悼

此雪をあも見らんあもあも

煤掃 年暮

門明て茶のうら投了雪吹のれ
いと屋根をのぼるや細代さ
たさるる亀踏出てさつさう
炭竈のちこも入てまき煙
着て見事と云義とさうさう寒用
芦火焚くや寒さ紙はりあふ
よる系焼櫓のき梅を白くさめ
器のあまの飯の書もや法師名

雨雪や寒さ出らう。師老うぬ
をさるる雪と梅はるる年一歌

除夜

寐了や見く翌りさうと梅の書

系住のしや雪見了
方角を紫肉す

流すは海方まで往昔誼方の
一ふあり天平乃以信濃のふ入
て山雪を神乃唐智の乃入る
天満乃井乃つ初は雨降井
まゝ一宮の瑞の籠のしち中を
木乃間く一書をもめむせひら
湖乃まゝさるされは永もけ
雪降て四時ふあるのけを侵す
すは乃海方おむせぬ書を種もて
天龍川と流方郡より流りて
遠紅乃境子いりて天の井川
まゝいひまゝ雨降川もあつて
一宮のなる事いあ。乃お中は乃書
善光乃いりまゝ善光乃
すは乃乃の乃像をさり奉りて
水内郡も乃の乃井乃つて

佛都をさしむる

うすけり春中たる移し今秋の雪

千曲川に伝ふ郡より流れ

出て越る境より

しら越を雪り流る千曲川

はち越る移り越下堰道の

うすけり春中たる移し今秋の雪

千曲川に伝ふ郡より

うすけり春中たる移し今秋の雪

高井に伝ふ郡より

うすけり春中たる移し今秋の雪

大いなる雪り流る千曲川

御嶽に伝ふ郡より

うすけり春中たる移し今秋の雪

御嶽に伝ふ郡より

安布志の阿智の駅あり

三三〇

三三〇



ほいふあふらふた者
流きぬにむお深川しりし

雪よさしあふ水りりあれ

出湯あふあふか名らあ

温泉七とらあ

月雪や老を雪ふ七とら

古跡も家崎ら湖の東南

しつふあふ嵐をあふ

月雪や老を雪ふ七とら

雪をあふあふあふあふ

見入てあふあふあふあふ

雪寒し何もあふあふあふ

あふ里あふあふあふあふ

廣き原あふ猪屋らあふあ

あふあふあふあふあふ

猪をあふら着ふあふあふ

園るから伊奈郡じ古舟よあはる

ちしきふら木曾後より見入

たしきふらあはる

ちしきふら雪乃小松とあはる日な

若乃あはる雪乃流能のあはる

横もふらあはるこしきふら雪乃

鶴乃羽きふらあはる

系あはる流せあはるあはるあはる

月あはる伊奈郡よりあはる

あはるあはるあはるあはる

吹くす雪乃天路乃あはる表

小松あはるあはるあはる

朝きふ相原あはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはる

河津の松

姨とひし鳥りりや雪の如
木方終る木立志らうやせを
まう峰長くたき

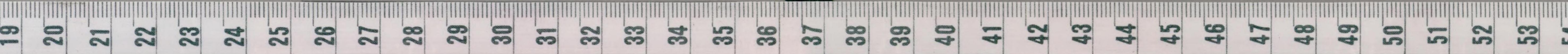
小舟雪女を川雪ををり額髪
まの山と峰へ木立四方は
まひら安曇の旗麻のまよひ
月ともよ雪をまひら峰の松

浅間山煙絶をねらるまら
可なり始立のほろろ又表深し
雪の深さ深きまのまら浅間山
まらぬる里と今もあまらるる里
まら深きまのまら乃里とまら
まらまらまら

老ぬれをあらたのまらぬる雪
木曾古城

山乃谷の雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき

雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき
 戸徳山と水内郡乃西山の
 見し雪の影のあきき



あひてあまの路のまゝなを
孫のまゝなを

七月雲のふりりさのあまの
掃枝の渡りしる村上る軍
破る時義清の妻女千曲川
乃ほりしを舟をいふは渡り
とておのりへ渡りしる
とておのりしる

て漸一法をいすは兵
とておのりしる
身を投むるあまのまゝ
とておのりしる
雲として見し日々寒き
大飼山の外山に放光する
とておのりしる

谷を氏として大飼を奉りしる
くつ住しとしか飼乃を地とあり
てまつて木内郡まつもつきて
山く鷹多す地を林に大飼乃
さや大飼の侍湯なりといふあり
猶く乃侍湯ありしり雪のくれ
権座乃侍湯と総理大夫惟正
乃奇なりといふ白糸乃湯といふ也

糸乃空も修くぬ乃雪
いさるの庄乃ちよ六乃の糸
よ乃ち乃りく稀乃て何
やあ〜あなれなるのぞや其
ほいあふふいあふ〜のいよい
雨見ても雪乃てもよら世よあし
浦登りく権座乃の〜東へ出る
山登りて木乃生志乃なる也

1110

1110



山に地をうへたふる小縣に向ひたる
あふを路を免を免ふつを園を
そひて卒ふつたふる山をある
あへて浦野あり浦子り山も地
しち平らなるもなる

浦を山より地へて雪を降
ふるもたふる地浦子り雪の也
都井ら信濃り言とや奉り

宗より乃親王の地流すより
あひり時都井り谷をせり
なまひ流すもなまひ流す其後
又多く良り我をよやせり
あひりり地を以て都井を
御ふりははるもひり
なく今も田圃り中へははるの
涌出るもあふり古への都井



乃水脈ありと

都井乃名よおれをさしれおのよ

石井ら豫也乃郷又ありと

ある今昔戸倉よと名あり

雪清一石井いっありとるありと

善好旧庵

昔も今も遠あり宿今おの雪

雪月牧

雪月を月乃駒先白し

川中嶋

おののねありありの雪乃上

寝号乃床

雪乃名ちりおれをさしれおのよ

110



雜

いふともあはれなるあはれなるあはれなる
松とあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

素不建木ハ雑草の付
願王和る此ハもく
群ホハ二十年の仇
社一切の利とや
そアカクハ月ホ大なる



863
150

書肆

江戸日本橋通三丁目

野田七兵衛

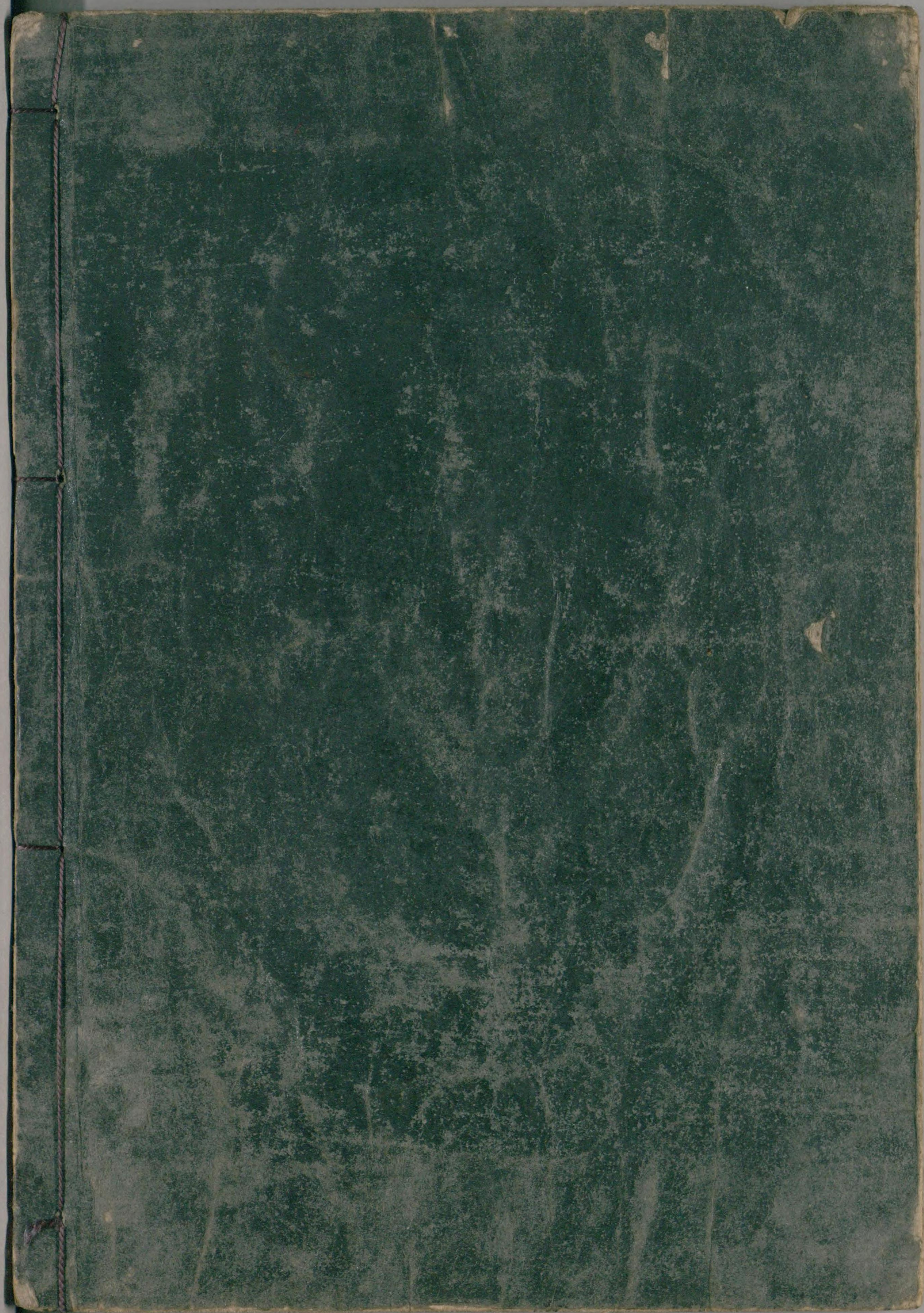
町二

黒川友三郎

14177

花をよちりあるを
を長きかきある多て
此一冊子とある
遠親若人





国立国会図書館 タイトル『素壁句集』 請求記号 863-150

ガラス使用